

一九七二、七七年

写真：「戦旗派コレクション」提供

ある赤ヘルノンセクトの系譜 全都高校生部落研連帯と首都圏青年連絡会議

今回は七〇年代初期に高校生から大学入学の時期を、部落解放運動と沖縄闘争、学園闘争を体験した方からの寄稿が得られた。党派の影響やオルグを受けつつも、自立したノンセクトの組織づくりの苦闘、全共闘運動崩壊後に運動を始めた当時の若者の思想的風土、反差別運動へのテーマの変遷がうかがえる。そして伝説の党派、ブント米山派の実像が明らかにされる。

井ノ川陽一

元共産主義者同盟米山派
一九七三年武蔵大学入学

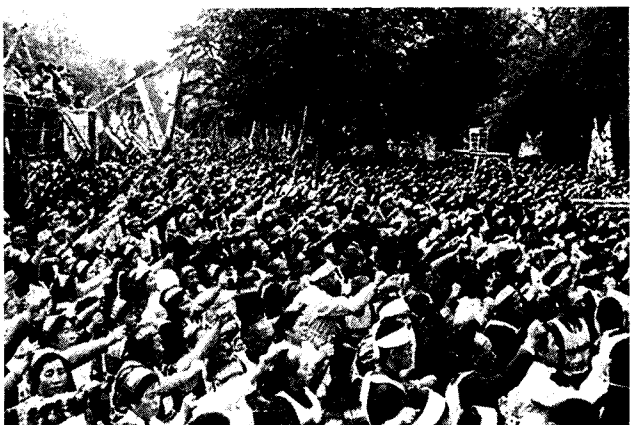
はじめに

本稿では、まず、一九七一年から一九七七年の期間に組織活動を展開した「全都高校生部落研連帯」と「首都圏青年連絡会議」の生成と解消の過程をたどり、その果たした役割と果たせ

なかつたことについて記述する。両者はノンセクトが主流の組織であったが、思想的、組織的つながりはない。両者を対象にするのは、筆者が両者に所属していたからである。また、それに関連する「武蔵大学闘争」などについても記述する。

次に、両者の運動においては、絶えず「何故闘うのか」が問われた。闘いに関与することの意味が問われ、そのことの答えを出すことが課題とされた。この問いには、党派の側から、自己を変革し「強固な」活動家になるという答が用意されていた。

74年狭山闘争には11万人が結集した(日比谷公園)



その一方で、管理社会の進行の中で、ある意味で「生きづらさを感じた者」のコミュニティでもあったノンセクトの活動集団においては、「何故闘うのか」という問いの答えは、「なぜ生きづらいのか」「どうしたらよいのか」という文脈において構想されようとしていた。そのことについて考えてみたい。

1 全都高校生部落研連帯と いう運動体

(1) 練馬高校社会問題研究部

東京都立練馬高校(*1)(以下、練高)

に社会問題研究部(以下、社研)が結成されたのは、一九七一年の五月。成城高校でバリエードストライキを實行し退学処分を受け、編入してきたAが中心となって、DIC(*2)の影響を受けた活動家や不平分子などが集まって結成された。文化祭での三里塚の映画上映、正門前の立て看板の出現など、開校以来の出来事が起きた(*3)。

社研は、狭山差別裁判糾弾闘争に参加していた。また、在校生であった「森永ヒ素ミルク被害者の会」のB(*4)の問題提起を受けて、森永製品不売運動と被害者支援の活動を行い、「東京・犯罪企業森永を告発する会」に参加していた。

一九七一年十月二十一日、清水谷公園、社研の黒ヘルメットを被って、初めて集会に参加した。十一月十九日、社研は沖繩批准国会粉砕を掲げて、早朝から正門前で反戦集会を開催。ギターに合わせて反戦歌を歌い、デモを行った。総勢十人の隊列であった。

社研の活動家になることは、教員に睨まれることであったが、その一方で高校生の日常性から幻想の上で離脱することであった。クラスメイトは「大衆」であり、活動家は「先進的」であるという思い込みである。私のように勉強・スポーツ・恋愛が苦手な高校生にとつては、クラス内の立場を一転させてしまう魅力的な論理であった(*

練高は、当時の第三学区の中では、最底辺の普通科であり、誰もが行きたくない高校であった。真面目に社会問題を考えようとする者と練高に来てしまったことの屈折感を抱えた不満分子が社研に集まっていた。

一九七二年、狭山差別糾弾弾争は、東京高等裁判所井波裁判長による定年退官を前にした結審・死刑判決策動という局面を迎えていた。日比谷小公園に支援者が結集し、公判闘争が闘われた。十月高裁井波は死刑判決をなしえずに退官する。

(2) 全都高校生部落研連帯の生成と解体

社研は「全都高校生部落研連帯」(以下、HBF)に加盟し、その拠点の一つであった。HBFは成城高校部落解放研究会が中心となつて組織した、ノンセクトを主流とした高校生戦線であった。「関東部落青年友の会」「全都神

奈川狭山差別裁判糾弾共闘会議」と三者共闘を組んでいた。政治潮流としては沖繩「返還」粉砕派の「沖繩共闘会議」に結集していた。高校生運動の中でいち早く「狭山差別裁判糾弾闘争」を提起し、一九七二年狭山公判闘争では百を超す隊列を登場させた。

一九七二年十月の高裁井波退官以降、公判闘争への結集という形で運動を形成してきたHBFは、狭山闘争の空白期の中で、方針をめぐる対立など内部問題が噴出していった。加えて、HBFの創設時からのメンバーで実質的に指導者であったCによる女性差別事件が発生した。

HBFは、ヘゲモニーをめぐつて各党派の争闘になり、活動停止となる。一九七三年十一月二十七日、一万五千人が結集した狭山再開公判闘争にHBFは隊列を登場させたが、一九七四年九月二十六日、日比谷公園を埋め尽くした十一万人集会には、HBFの隊列はなかった。

義者」と「イズム」(＝共産主義者同盟理論機関誌「共産主義」の違いや「止揚」という言葉の意味を教わったことがある。HBF内のノンセクトの活動家の中では、Cは絶対的な存在であった。Cに評価されると活動家として認められたようで喜んだものだ。「指導」被指導」の関係の固定化は「スターリン官僚主義」でありよくないとCから言われれば、それに合意したが、私も含めて、みなCから「指導」されることを望んでいた。Cが「8・25共闘(*6)」へ結集すれば、ともに赤へルを被るという者はたくさんいた。

Cは「紀極舎」という組織を立ち上げ、ノンセクト活動家の高校卒業後の結集体にしていった。その「紀極舎」の事務所、Cが複数の女性と性的行為をもったことが発覚したのだ。「女性差別事件」と規定され、糾弾が開始された。Cは、その過程で、自殺未遂事件を起こす。その遺書には、性的行為はコミュニケーションの手段に過

ぎないと記されていた。また、自らが「被爆二世」であること告白し、「被爆者解放」という重い課題を誰にも言わせはしない」と記されていた。Cが「被爆二世」であつたどうかは不明である。Cはその後、行方不明となった。Cを糾弾することは、Cを信頼し共感した分だけ、自らをも批判的に見つめなおすことでもあつたはずである。だが、そのような形での批判が展開されることはなかった。

HBFのノンセクトは、Cを指導者に仰ぐいわば、C派であつた。Cなき後にそれは崩壊し、各派からのオルグの対象となる。HBFは、狭山闘争と部落解放闘争の課題を、一九七〇年代初頭に高校生運動の中に提起する先駆的役割を担った。また、党派間の緊張が高まる中における、都内のノンセクトの集合体として一つの潮流を創出したと言える。しかし、HBF内のノンセクトが崩壊するとともに解体することになったのだ。

仲間同士でどの潮流を支持するかを議論することもなくなつた。姿を見なくなると、ある日、党派の隊列に登場していた。解体はあつという間であつた。都内のノンセクト主流の高校生戦線はこれ以降登場することはなかった。

社研は黒ヘルノンセクトの高校生運動の拠点になり、各派からの批判やオルグに対抗して、ノンセクト運動を守っていた。党派の利害に左右されず、狭山闘争を中心に闘いたいという主張であつた。一九七〇年代初期の東京の高校生運動が分解し崩壊していくたなかに社研はあつたが、一九七六年社研は廃部となつた。

Cの問題点について述べておこう。CはHBFの創設者の一人であつた。Aと同じく成城高校の出身であつた。当時二十歳前後であり、われわれ現役高校生からは「職業的革命家」のように見えた。Cから「イスト」(＝革命的共産主義者同盟政治機関誌「共産主

(3) Aの問いかけたもの

Aは、社研の創始者であり、リーダーであつた。「官僚主義者」と呼ばれていた。相手を論破するまで議論するタイプの人間であつた。Aはよく、周囲の人間に、戦争や差別について、「君は人間として許せるのか」と問いかけた。問いに明確に答えられないでいるかと、それは君が「差別する側にいるからだ」と畳みかけてきた。うしろめたさの組織化であつた。差別に加担したくなければ、「一緒にやるしかないよ」と、社研に勧誘した。Aは、君は「何故闘うのか」と問うた。「被差別人民は生きることが闘いである。我々は何時でも逃げる事ができる。退路を絶たなければならぬ」と語つた。

差別解体や戦争反対は誰にも否定できない。いつもAの側に「正義」があつた。差別を解体するためには体制を打倒するしかない。政治活動の実践のなかで、差別意識は克服される。Aの問

いは明快な論理で構成されていた。

この論理では、差別構造の解体は革命成就の時まで、先送りされてしまうことになる。また、差別構造の解体には、政治的課題だけではなく、社会的課題、文化的課題も不可欠であるとすれば、革命の前にも、後にもやるべきことはあるはずである。それ以上に、この論理では、ノンセクトでありながら、革命党派に収斂されていく必然をもっていた。

C問題の発生により、ノンセクトではやっていけないのではないかという思いが広がった。党派のオルグが入り、また自ら進んで党派を選択する者も現れた。

生き急いだ人間がいた。一九七六年冬、Dが亡くなった。川崎のアパートの自室で亡くなっているのが発見された。喘息発作で呼吸困難に陥ったとのことであった。享年二十一。Dは、一九七一年鳥根県から単身上京し、練高の二年次に編入してきた。HBF内の

邦」は「死滅する大きな国家」であり、建国されると同時に、国家の死滅のプロセスに突入する。

過渡期世界には、過渡期世界独特の矛盾が現れる。階級（労働）的矛盾、民族的矛盾、家族矛盾である。被抑圧民族人民は、民族自決権に基づき、独自の「ソビエト共和国」を建国し、「世界ソビエト共和国連邦」を構成する有機的な構成要素となる。また、沖縄民衆を「沖縄民族」として規定した。一九七二年沖縄返還は沖縄の再併合であるとした。沖縄民族人民の独自の国家建設を支持する、民族自決権を支持することを第一の課題とした。沖縄闘争は綱領的に最優先の課題であった。

家族矛盾のところでは、障害者を抹殺する優性思想の粉砕を掲げ、リブ派の「中絶の自由」の主張に反対する立場をとった。

そして「建国―建党―健軍」路線を掲げていた。「沖縄人民の民族自決権支持・擁護」「本工組合主義の克服・

ノンセクトが解体していく時期の社研の仲間であった。Aと違い細かいことを気にしないおらかな人間だった。家業の医院を継ぐために医学部を目指していた。喘息発作があり、小型の吸入器をいつも携帯していた。一九七四年卒業後、ある党派に加入し、川崎に住むと言いつたのを記憶している。

池袋の喫茶店で「利用されるだけだから」と翻意を促したが、決意は変わらない。「労働者になって組織化をする」と語った。「鶴見を日本のペトログラードにするんだ」。そう言つて笑つた。そこには、純化されたAの論理があった。会つたのはそれが最後となつた。Aに責任はないが、A（*7）が発した問いかけは、Dを生き急がせることになった。

特権的學生運動の克服」を運動論の基礎にしていた。

帝国主義は、アジア第三世界から富を収奪し、その本国では、被抑圧民族人民を、社会関係から排除し抑圧している。「外」と「内」における収奪と抑圧の上に、帝国主義本国人民の社会関係は成立している。帝国主義本国人民にとつては、抑圧者、差別者としての特権性を認識し、被抑圧民族人民の解放闘争に「奉仕・従属」することが、革命運動の第一の課題になる。

労働運動では、帝国主義本国人民の利益だけを追求する「本工組合主義」を克服することが課題とされた。学生運動では、被抑圧民族人民に対して抑圧的、差別的、特権的な学生運動を克服し、被抑圧民族人民の解放闘争に奉仕・従属する運動を創出することが課題とされた（*9）。

大衆的組織としては、「荒川地区入管体制粉砕闘争実行委員会」「東部反戦連絡会議」「沖縄青年同盟との対話

2 首都圏青年連絡会議と皇居突入闘争

(1) 共産主義者同盟東部地区委員会

共産主義者同盟東部地区委員会は「荒川フロント」、指導者の名前、米山（*8）から、「米山派」とも称されていた。東部地区委員会は米山派を名ならず、あくまでも自らを東部地区委員会とした（本稿では便宜上、Y派とする）。共産主義者同盟は現在（当時）、党内闘争を継続している。共産主義者同盟は一つであり、あくまでも統一にむけた党内闘争を展開すべきであるというのが、東部地区委員会の立場であった。その東部地区委員会は、過渡期世界論を綱領的立場としていた。

過渡期世界の革命の最大の課題（使命）は、一九一七ロシア十月革命によって、世界は、人類前史から後史へと移行する過渡期世界に突入した。世界革命によって「世界ソビエト共和国連邦」を樹立する。「世界ソビエト共和国連

討論実行委員会」などの組織を運営していた。

(2) 「青年連絡会議」の栄光と悲慘

学生戦線では、「全都学生共同行動実行委員会」、「沖縄海洋粉砕！CT S粉砕！首都圏青年連絡会議」（以下、「青年連絡会議」）を運営していた。学生戦線は、早稲田大学のグループである日本沖縄研究会（以下、N研）に指導されていた。

一九七四年七月「青年連絡会議」が結成される。四つの大学の活動家が結集する組織（*10）であった。「青年連絡会議」は、N研の指導の下にあったが、実体としては、ノンセクトの学生組織の寄り合い所帯であった。赤ヘルを被っていたが、共産主義者同盟系列の一員だと思っているメンバーはいなかった。出入りも自由で、親和的雰囲気を持つていた。一般学生としての学生生活への違和感をもつもの、そこから疎外されたものなど、ここしか居

場所がないような仲間がたくさんいた。ある人は就職することや卒業することさえも難しくそうであった。大学に入つたが、楽しいことが一つもない。友達も一人もできない。クラスの飲み会にも参加できない。しかし、なにかしてみたいというような人が〇〇問題研究会にふらつと立ち寄つて以来、居ついたりしたりした。そこは、疎外された者のコミュニティでもあった。私は武蔵大学でこのグループに出会った。

一九七五年五月十五日沖繩デーには百を越す隊列で登場した。「青年連絡会議」結成以来の最大規模の集会とデモであった。「青年連絡会議」の行動はこれだけにとどまらなかった。

七月十二日、「青年連絡会議」の四人の行動隊が坂下門から皇居に突入したのだ（*11）。四人の乗った車は、坂下門を警備する皇宮護衛官の阻止線を突破し、皇居の内部に突入し、「皇太子訪沖阻止」「沖繩海洋博粉砕」の旗を掲げたのである。

登山等が奨励され、実行された。帝国主義は人民の健康を破壊する。SL活動をまき起こし、人民の健康をとり戻すという方針であった。

ベトナム人民は青竹踏みをしながら、解放闘争に勝利したとされ、青竹踏みが奨励された。午前五時に起床してマラソン、体操を行い、会議をすることが義務づけられた。王子にあつたアパートの一室で共同生活し、早朝、普段着のまま、ドタドタと走るのであった。異様な光景であった。学対と学生戦線で総勢六人。学籍のある者なし。これがすべてであった。

一九七五年十月、7・12皇居突入闘争の第一回公判が開廷された。一九七七年十月までの二年間、公判闘争が闘われた。東京地方裁判所の判決は四名とも懲役一年六ヶ月、執行猶予四年であった。裁判の争点は「建造物不法侵入罪」の適用ができるかどうか、つまり皇居が建造物か否かの点であった。建造物であれば、誰の何のための建造

四名は不当逮捕後、完全黙秘を貫き、起訴され、十月に東京地裁公判が開かれるまで東京拘留所に勾留された。

7・12は、N研が計画したものであつた。当日までの「青年連絡会議」の殆どのメンバーは皇居突入のことを知らなかつた。7・12は組織の中に深刻な動揺を生みだした。「第2第3の7・12」を言いだす者と組織を去る者が現れた。組織の状況は一変し、四つの大学にいたメンバーの大半がいなくなつた。組織が自分の知らないところで動いていたことへの驚きと不信であつた。

精神を病む者も現れた。組織はさまざまその者を実家に帰した。精神が不安定になるのは思想の弱さの現れだとされた。一九七六年一月十七日、皇太子訪沖阻止闘争の隊列はわずかに六人歩道を行進させられた。

(3) Y派学生戦線の解体

十月にY派の党連絡会議が召集され

物なのかを切り口にしていこうとした。

被告団の方針は、沖繩人民や部落大衆が、日本帝国主義と天皇制とによって、歴史的に抑圧されてきたことを立証し、天皇の戦争責任を弾劾する場に転化するというものであつた。

被告団は法廷で、沖繩人民や部落大衆が天皇制と闘う必然性を明らかにしてきたが、自分達が天皇制と闘う必然性は明らかにしえなかつた。そこには「代行主義」の限界があつた。

さて、この節の最後に7・12の総括らしきものを述べる。

Y派学生戦線が解体の最大の要因は、お金（闘争資金）の問題である。行動隊の四名の保釈金の殆どを家族が負担した。保釈金を組織は集めることができなかつたのである。そればかりでない。その他の経費も家族が負担した。皇居突入では、レンタカーを借りて突入を図つたため、同日以降のレンタル費用、修理費、突入の過程でタクシーに追突した際の補償金などが発生

た。この場で、N研指導部が、最高指導者から、日和見主義として批判された。そのメンバーは組織から姿を消した。

党連絡会議以後、新たな学対（学生対策部）が発足した。昨日までの仲間が学対となった。学対が指導したのは「自己点検運動を通じた共産主義化」であつた。

「帝国主義の腐敗・墮落との闘争」が提起された。帝国主義の腐朽化とともに、社会は腐敗と墮落を極めていく。こうした腐敗、墮落は帝国主義からの買収であり、抑圧への加担になる。これを克服するためには、小ブルジョアとしての「生根」を叩き直さないとけないとされ、「生活点検運動」が開始される。起床・就寝時間は守られているか、規律ある生活がなされているかを相互に監視しあうことになった。

「生活点検運動」の次には、スポーツ・レクリエーション活動（以下、SL活動）が方針化された。マラソン、体操

し、被告に請求された。

「青年連絡会議」は闘争資金についての方針を持っていなかった。闘争資金はどうにかなるものだと考えていた。皇居突入以降、裁判などのための費用を賄うための闘争資金（カンパ）は全く集まらなかった。もともと学生とOBしかない組織であつた。しかも闘争後、殆どが組織を離れてしまった。

家族の費用負担がなかつたら、被告は判決の日まで二年三ヶ月の間、拘留所を出られなかつた。また、レンタカー費用、タクシー修理費の請求問題で別の裁判の被告になつていたのである。

組織がなくなつても負債は残る。当事者はその負債を負わなければならない。闘争の政治的意義と闘争資金（カンパ）は関係がない。政治的意義が高ければ闘争資金（カンパ）が集まるというわけではない。資金を集めるためには、事務所、救済会、資金を集める口座開設などの組織的対応が必要であつた。しかし、それらが整備される

ことはなかった。

闘争資金についての展望を持ち得ないものは闘争することができない。Y派学生戦線が解体した要因は、「政治利用主義による青年連絡会議の解体」「生活点検運動」「政治方針の混乱」だけにあつたわけではない。明らかにお金(闘争資金)が尽きたのである。青年連絡会議は、「生きづらさを抱えた者」や「行く場所のない者」の「ゆるい」コミュニティであった。それが最大の意義である。それは7・12の後に瞬く間に消滅してしまつた。

3 武蔵大学の学園闘争

(1) 一九七五―七六学費値上げ

阻止闘争

一九七五年十一月、武蔵大学当局は次年度からの授業料を一挙に二倍に値上げすることを発表した。二倍もの学費値上げに対して、反対闘争が沸き起こつた(*12)。

当局との大衆団交を求めて、全学

拡充、③固定式机・イスの可動化、④四日間の休講などの四項目を要求して闘争を開始した。闘争は、四度の当局交渉、大学事務室占拠という画期的状況を作りだしたにも関わらず、四日間の休講を実現したことで終わつた。十二月十八日、四項目要求闘争への報復として当局は「学則違反行為」があつたとして、無期停学二名を含む八名の学生に懲戒処分を發動した。八名の学生は「被処分団」を結成し、文連は「処分撤回闘争委員会」を結成した。「処分白紙撤回要求署名」運動を開始し、七百七十八名の署名を集めた(学

自治会を中心に大衆団交実現全学実行委員会(以下、団実委)が結成された。文化団体連合会(以下、文連)はサークル学値上げ阻止委員会(以下、阻止委)を結成した。当局は大衆団交を認めず、説明会を開催したものの、学生の追及に答えられず、一方的に閉会する。学生大会では、学費値上げ白紙撤回要求決議をめぐり、体育会系と対立し、流会となつた。十二月正門にバリケードが築かれストライキに突入した。バリケード防衛隊が組織され、一昼夜バリケードの上に防衛隊が立つた。ストライキは越年した。年が明けて、後期試験が迫る中で、学費闘争は転換点を迎える。後期試験を受けたい学生、卒業を控えた学生からバリケード解除の声が高まり、その前に団実委ではバリケードは解除することになつた。これに異議を唱えたのが、Y派である。阻止委で学費闘争の継続を主張し、情宣活動を繰り返した。これに対し、当局は入学試験を防衛することを

口実として、二月十三日機動隊導入を行った。学生会館にいた学生十三名が「不退去罪」で逮捕された。入試期間中、大学は立ち入り禁止となり、機動隊と当局と対峙する中で正門前での抗議集会を貫徹した。

(2) 一九七七―七八学園闘争・処分撤回闘争

処分撤回闘争

一九七〇年代、武蔵大学は経営の「近代化・合理化」をマスプロ化、学費値上げによって推進した。武蔵大学の学生運動は、軟弱さが伝統で、当局も強硬策をとらず、ある一線をこえないという暗黙の了解があつた。この「協調」がくずれるのは、一九七六年二月の学費闘争における機動隊導入であり、これを機に当局は露骨な弾圧に転ずる。

一九七七年六月、当局の管理支配の強化に対抗して、サークル活動、文化活動の拠点としての白雉祭(学園祭)防衛のため文連、白雉祭実行委員会は、①三百二十七万円の援助金、②備品の

生数は当時約三千人)。当局は処分に關する一切の学生との交渉を拒否した。

学園祭闘争の盛り上がりは、学園祭が終了すると同時に消えていき、それを見計らつたかのように処分が出された。「被処分団」は孤立の中から運動を始めなければならなかつた。

一九七八年二月、被処分者を含む三名の学生が、学生部長襲撃を実行しようとしたとして、「凶器準備集合罪」でデッチ上げ逮捕された。

四月以降、二度の登学闘争、学生会での議論が展開された。一九七九年四月、二名の無期停学処分が解除され

た。二名はすでに就労しており、復学することはなかつた。敗北であつた。

4 それから

Y派学生戦線解体後、私はノンセクトの一員として三里塚に向かう。三里塚闘争に連帯する会・練馬(*13)と行動を共にさせていた。会の運営はEが中心になつていった。火炎瓶の炎が着衣に引火し燃え上がった仲間、覆いかぶさつて消火したというエピソードをもつ人物であつた(*14)。会には東京経済大学と国学院大学の活動家(*15)、東京北部の労働者が参加し

改訂版

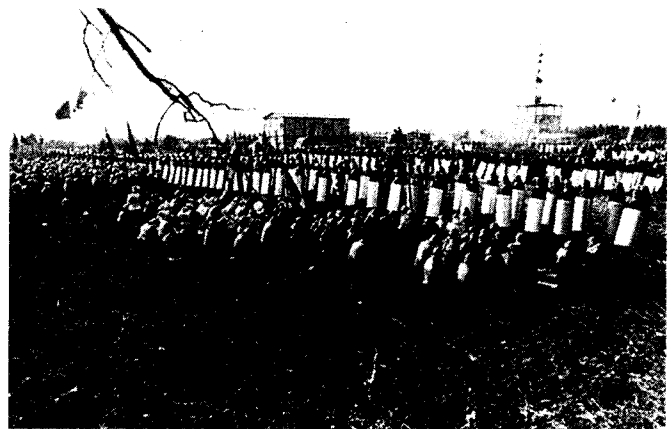
登記子1968を語る

【加藤登記子著】68年革命とそれが残したテーマ、反戦運動と環境保護、農的生活について、加藤登記子が熱い思いを語つた40時間。全共闘運動から50年のいまこそ読み返す。上野千鶴子とのバチバチ対論収録。

800円+税

世界書院

〒136-0071
東京都江東区亀戸8-25-12
電話：03-5875-4116



三里塚2月要塞戦

ていた(*16)。
一九七七年は、五月に岩山大鉄塔破壊、東山薫さん虐殺、八月に石川一雄さんへの上告棄却など国家権力による三里塚闘争、狭山闘争に対する攻撃が相次いだ。

五月八日岩山大鉄塔破壊に抗議して第五ゲート周辺で実力闘争が展開され(*17)、催涙ガスの飛び交う中で闘われた千代田農協集会、労農合宿所建設の初期のトイレの穴を掘ったのは私達である。十月に三里塚開港阻止を掲げて、千川通りを江古田から練馬までデモ行進した。後にも先にも三里塚闘争を掲げてのデモ行進はこれ以外ない。

一九七八年、二月要塞戦外周関係、三月、五月開港阻止決戦を闘い、その過程で四名の逮捕者を出した。会には救援活動、裁判闘争、生活支援という重い課題が残された。その後、裁判闘争を支援する救援会ごとに、会は分解していくことになった。

のように闘うか」だけを考えた人間は生き残った。

一九七〇年代のはじめに、問われたことである「なぜ闘うのか」「なぜ生きるのか」に答えはない。それはもともと、この問いが、活動の入口のところで発せられ、活動家、革命党派の同盟員になるという答(ゴール)が用意された問いであったからである。

しかし、その問いの答えを、「党派的なもの」の中に求めるのではなく、自分自身で引き受け、答えていこうとした営為もまたあった。この営為の中にこそ意味があったというべきであろう。

一九七五年夏、「青年連絡会議」に集まっていたのは、生きづらさを抱えた者たちであった。社会問題に関心はあったが、革命的學生などではなかった。ここでは、「なぜ闘うのか」「なぜ生きるのか」は、「力強く」とか「主体的に」とか「確信をもって」とかが苦手なものにとって、「自己変革して

活動家になること」とは別の分脈で考えられることになった。

その中には、「なぜ生きづらいいのか」「なぜ生きなければならないのか」という問いが含まれていたように思う。管理社会にも党派にも行けない者は、この問いを持ち続けることになる。

そこにあつたのは、生きづらさを抱えた者たちの居場所「コミュニティ」であつた。そのコミュニティは外から「指導」しようとする消滅し、そのままにしておけば暴走する。コミュニティから出発した活動家は、コミュニティの表現形態である。コミュニティがなくなれば、活動家もいなくなるのである。そして、そこからしか始まらない。学費闘争とともに闘い、その後、映像作家として名作「ヘリウッド」を監督することになるG(*18)は、いつも言っていた。「おい、これでいいのよ」。いいわけがない。私たちに残された課題は、どんな形であるにせよ、生き延びることにある。

一九八六年九月Fという仲間が亡くなった。享年三十。住まいのある高層住宅からの転落死であつた。遺書はなく事故か自死か今もわからない。Fは武蔵大学を卒業してからも、地域の狭山闘争実行委員会の一員として活動をしていた。その数年前から精神が不安定になる症状が現われるようになった。治療を続けながら、職場復帰し、仲間が支援していた。ある時から、Fから深夜に電話がかかってくるようになった。躁状態であつた。他の知り合いのところにも深夜の電話があつた。それからしばらくして訃報を聞いた。かつてのY派の対応を批判しておきながら、結局、何もできなかった。

私が経験した運動においては、「なぜ闘うのか」「なぜ生きるのか」というテーマは、「全共闘運動なきあと」の一九七〇年代中期の運動の中で、しきりに語られてきたように思う。その後、「なぜ闘うのか」を考えた人間は生き残れなかった。私を含めて、「ど

*1 卒業生に「ミスター年金」こと民主党権初代厚生労働大臣の長妻昭氏がいる。長妻少年は一九七六年入学。社研の黒ヘルメットには多分、出合っていない。

*2 「D・C・共産主義青年団」。「破壊こそ創造である」を標榜する元東大共闘の土方健氏を指導者とする毛沢東派の組織。後年、元D・Cで、学習塾を経営するHと出会う。全国展開の進学塾であるにも関わらず自分は「人民に奉仕している」と言うところが元D・Cらしい。

*3 社研以前、一九七〇年、生徒会を中心に制服制度撤廃闘争が闘われ、制服制度は廃止された。この闘争を担ったのはD・Cの諸君であつた。

*4 在学中の一九七〇年、小児科学会において、「赤ん坊だったミルク中毒の被害者を健診して、異常なし、後遺症なし」といきったのは小児科学会に属する学者たちだった」と発言し、同学会を告発した。

*5 小林哲夫著「高校紛争1969-1970」(中央公論新社、二〇一二年)によれば、一九六九年の高校生活動家は随分ストイックであることが分かる。社研は普通に喫煙、飲酒をしていたし、ヘルメットはあるところから、竹竿は生えだし、ヘルメットは調子落としていた。同書には都立上野高校校長の森杉多氏が「自らの沖繩戦の経験から反戦平和の意志を持っていたこと」や「高校生活動家のことを理解していたこと」などが紹介されている(百十六頁)。氏は社研当時の校長であつた。もっと話を聞いておけばよ

「小暮隆生」はデーモン閣下であると言われている。

原稿の募集

「新左翼運動クロニクル」の原稿を募集しています。七〇年代以降、九〇年代にいたる学生運動、社会運動の実相を伝える記録は、六〇年代のものとは比べるとあまり残されていません。そこには先行世代の運動を追体験する以上に、わが国の社会運動の経験が豊富化されているはずですが、いっぽうで七〇年代以降の新左翼運動は、内ゲバと混迷をかさねる過程でもありました。その経験を伝えることは、新しい世代への貴重な教訓になるはずですが、構想段階のものでも結構ですが、サンプルになる草稿といっしょに編集部にお送りください。六〇年代の論考も募っています。

- * 12 りの塔決起がある。
全学自治会執行部には労働者階級解放闘争同盟(後のレーニン主義学生同盟)学生連帯全国委員会、文化団体連合会執行部にはY派、その他、日本労働者党(毛沢東派、青年共産主義委員会(後の共産主義青年同盟(準))、社会主義青年同盟社会主義協会(向坂)派、ノンセクトがいた。
- * 13 一九七四年、戸村一作反対同盟委員長の参議院選挙出馬を支援する全国組織「戸村一作と三里塚闘争に連帯する会」が結成された。一九七六年に「三里塚闘争に連帯する会」が再編成され、三里塚闘争の全国化と開港阻止の活動を展開した。
- * 14 故人。全通信労働組合(全通)の活動家でもあった。晩年は環境問題に取り組み、地域の河川に營を呼び戻す活動をしていた。その仲間の一人はパン屋さんを開店している。
- * 15 管制塔占拠闘争を闘った中川憲一氏も顔を出していた。
- * 16 この日、鉄パイプで武装した部隊の中に社研OBの1人がいた。すれ違いざまに「こんなところでポーツとしてんじゃねよ」と言われた。チコちゃんだった。その後、姿を見ない。
- * 17 長嶺高文。武蔵大学在学中より、自主映画を製作。一九七八年「喜談 南海變化王」を監督。二作目「歌姫魔界をゆく」は高田馬場パール座上映で連日盛況。一九八二年遠藤賢司主演の映画「ハリウッド」を監督。二〇一四年、十月死去。享年六十。同じく主演の
- * 18
- * 11 組織のあった早稲田、明治、武蔵、立正の各大学から一名ずつ行動隊に参加している。二名はすでに故人。一九七一年九月二十五日に沖縄青年委員会の四名が坂下門から皇居突入を敢行している。一九七五年における海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止闘争として、六月二十五日、沖縄嘉手納基地ゲート前における船本洲治氏による焼身決起。七月十七日、沖縄解放同盟準備会と共産主義者同盟(戦旗西田派)のメンバーによるひめゆ
- * 10 明治大学R戦線、立正大学R戦線、武蔵大学青年会議、大正大学全学闘争委員会であった。
- * 9 家宅捜査の度に散逸し、参考文献は手元にない。
- * 8 故人。一九七〇年八月二十二日、共産主義者同盟第九回大会(明大生田校舎)の中央委員の中に「中島二郎(米山〇〇)」の記載がある。「ヨネゴン」と呼ばれていた。
- * 7 Aは卒業後、姿を消す。一九八五年Aは突如復活し、至る所で「君は人間として許せるのか」を連発した。十年間の記憶がどこかに飛んでいってしまっていた。そしてまた姿を消した。
- * 6 一九七二年八月二十五日、反戦共闘(レーニン研究会)、旧ML派(解放委員会)、赤色戦線派などが「ベトナム八月革命支援集会」を開催。「8・25共闘」を結成。
- * 5
- * 4
- * 3
- * 2
- * 1